

氏名	わん ほん しん 王 紅 欣
学位の種類	博士 (医学)
学位記番号	甲第457号
学位授与年月日	平成16年 3月16日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	集中内観中の不安水準の変化 － STAI を用いた研究 (第2報) －
学位論文審査委員	(主査) 三原 基之 (副査) 飯野 晃啓 川原 隆造

学位論文の内容の要旨

内観療法は弱い自我を保護するような治療構造と技法を備えており、適応範囲も広く、特に不安性障害に効果が著しい。従って、内観者の不安レベルを低下させることが予想されるが、その点について検討された報告はない。この度、集中内観前（内観前）、集中内観中（内観中）、集中内観後（内観後）に State Trait Anxiety Inventory (STAI)日本語版を用いて検討した。

対象と方法

本研究の対象は、1999年7月から8月までの2ヶ月間北陸内観研修所で集中内観を受けた者のうち、この調査研究に協力の同意が得られた69名である。対象者の平均年齢（±SD）は37.8±14.5（12.0～65.0）歳、男性33名の平均年齢は39.5±15.8（15.0～64.0）歳、女性36名の平均年齢は36.1±13.2歳（12.0～65.0歳）であった。内観前、内観中の7日間、および内観後に合計9回のSTAI日本語版の質問用紙を用いて不安水準を自己評価させた。また内観前に調査用紙を配布し、氏名（匿名でも可）、年齢、性別、就労状況、精神科的疾患の有無について記入させた。内観前、内観中および内観後におけるSTAIの得点を状態不安の得点（S不安）と特性不安の得点（T不安）に分け、まず全症例の変化について評価し、それに男性群と女性群、患者群（20名）と健常群（49名）、40歳未満群（42名）と40歳以上群（27名）に分けてS・T不安の変化を比較した。仕事については就労群（42名）と非就労群（27名）の2群に分けた。

結果は平均値±標準偏差で表した。統計学的検定は内観前と内観中、内観後の比較には、Wilcoxonの符号順位検定を用い、内観前の各群の比較にはMann-WhitneyのU検定を用いた。

結果

1) 全症例のS不安については内観1日目から漸減し、内観中、内観後のいずれも内観前より有意に低下した。

2) 全症例のT不安については内観1日目から漸減したが、内観前より有意な低下を生じたのは5日目からであった。

3) 40歳以上群と40歳未満群、就労群と非就労群に分けて検討すると、内観前に40歳以上群のS不安と就労群のS・T不安は他の群より有意に低値であった。S不安については総ての群で内観前より有意に漸減したのに対して、T不安については40歳以上群と就労群はともに内観前と比較して5日目から有意に低下し、40歳未満群と非就労群は6日目から有意な低下を示した。

4) 健常群の内観前のS・T不安は患者群のそれらより有意に低値であった。S不安については2群とも集中内観前と比較して有意に漸減していた。T不安については健常群が5日目から有意な低下を示したのに対して、患者群は7日目から有意な低下を示した。患者群と健常群の間のこの差異は性別、年齢別及び就労状況によるものではなかった。

5) 性差について検討すると、S不安は男性群、女性群ともに集中内観前と比較して有意に漸減した。男性群のT不安は3日目以降有意な低下を認めたが、女性群のT不安は内観後だけに有意な低下を認めた。男性群と女性群の間では年齢、精神疾患の有無及び就労状況に差異は認められなかった。

考 察

STAIのS不安については、Wilkinson, S.ら(1999)、Palakanis, K. C.ら(1994)の心理療法による所見や、水口ら(1991)のディアゼパム0.2mg/kg経口投与による所見から、S不安の低下は現在の不安レベルの低下を表していることを証明している。T不安については、精神的健康度と高い逆相関が見られ(稲永ら2000)、T不安の低下は心身症状の改善を示唆する(Kathleen M.ら、1993)。従って、T不安は状況を脅威的で危険だと認知して反応する傾性を表す不安であり、一般に長期の成功的な治療を受けなければ緩和されない不安である(Janis、1971)。

1) 集中内観では内観の日数が進むにつれてS不安が有意に低下していたことにより、内観療法は状態不安レベルを低下させる治療構造と技法を備えていると考えられる。その結果、内観者は1週間継続して自己の内面を厳しく見つめることができると考えられる。

2) T不安は内観前と比較して内観5、6、7日目と内観後に有意に低下していた。この結果は内観者が5、6日目頃から心理的展開を生ずることと一致し、注目すべき所見であると考えられる。

3) 患者群と健常群を比較すると、S不安については両群とも同様な変動であった。T不安については、患者群は7日目から有意に低下し、健常群は5日目から有意に低下した。このことは症状や病理を抱えている患者群の健康度が健常者より低いことに起因しているものと考えられる。

4) 就労群と非就労群を比較すると、S不安については両群とも同様な変化であった。T不安については、就労群は非就労群より1日早く有意に低下していた。このことは就労者の精神健康度が高いと考えられる。

5) 年齢別に分けて比較すると、40歳以上群と40歳未満群のS不安は同様な変動であった。T不安については、40歳以上群は40歳未満群より1日早く有意に低下していた。このことは40歳未満群では非就労者が40歳以上群より多かったことによるものと考えられる。

6) 性別についての検討では、男性のT不安は3日目から有意に低下したのに対して、女性のT不安は集中内観後だけに有意に低下した。すなわち、女性群は男性群に比して、T不安の有意な変動が起りにくいことを示唆している。また、男性群と女性群に関して就労者と非就労者、健常者と患者の割合を検討したが、両群に差異を認めなかった。この点については、今後詳しく検討されるべきであると考えられる。

結 論

1) 集中内観は状態不安(S不安)を漸次有意に低下させる治療構造と技法を備えた精神療法である。

2) 集中内観では5日目から特性不安 (T 不安) の有意な低下を認めたことから、5日目以後に内観者の心理的な展開が引き起こされるものであると結論することができる。

論文審査の結果の要旨

この研究は内観研修所で集中内観を受けた 69 名の内観者を対象に、集中内観前・中・後に STAI (状態・特性不安心理テスト日本語版) を用いて不安水準の変化について調査した。その結果、①として、全症例の状態不安の得点は内観1日目から漸減し、内観中、内観後のいずれも内観前より有意に低下した。この結果から、内観療法は状態不安レベルを低下させる治療構造と技法を備えていることが証明される。②として、全症例の特性不安の得点については内観1日目から漸減し、5日目から有意に低下した。この結果から集中内観は特性不安レベルを漸減させる精神療法で、内観5、6日目頃から心理的な展開が生ずることと一致し極めて重要な所見である。

本研究は内観療法の治療機序を解明するうえで、また内観者の集中内観中の心理的变化を把握するうえで極めて重要な示唆を与える論文である。従って、本論文は、精神神経医学分野での学術水準を明らかに高めたものと認める。